

憶出と偶感

中山, 竹二郎

<https://doi.org/10.15017/2332852>

出版情報 : 文學研究. 57, pp.1-4, 1958-03-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

憶 出 と 偶 感

中山竹二郎

九州大学に於ける三十年間の教師生活をいま振り返つてみると、何としても戦争に因る十年間の空白は痛ましい憶出の種である。僕のように当時の世潮の波に乗らない英文学を専攻していた者は、みずから進んで専門の領域から踏み出して仕事を求めない限り、世間的には疎んぜられ、ときには白眼視された存在に過ぎなかつた。同学の人々の中で転身の術に長じ巧にパスに乗換えて花々しい活動をした学者先生もあつたらしい。それはそれで良かったのであろうし、またそうした人は戦後に嚴肅な自己反省をしたことであらうから今更咎め立てるのは野暮である。しかし文化人と称せられる或る種の人々はその体内にジャーナリズムの病菌を有つていて絶えず自分の名前や自分の仕事が生間に知られないと幸福感を味い得ない固疾があるようで、まことにお気の毒である。

英語教育が戦争中軽視されたことも忘れられない。「米英鬼畜」の言語として英語を教課から外した中等学校さえあつた。勇敢と先見の明を有つた英語教師で進んで南万司政官に転身した例を幾つか身近かに知つている。(他方「鬼畜」の米國では開戦早々太平洋洋作戦に関係した軍人に対して日本語を頗る能率的に教えた。終戦直後博多に進駐して来たアメリカ将兵の中に日本語の読み書きのできる者が多いのに驚いた記憶がある)

しかし九州大学に関する限り英文学の研究とその授業について当局から何等の干渉を受けなかつたことをいま想起する。戦争のさなかに教室では学生とともに Chaucer を読んでいた。英文学の専攻学生も学徒動員のためその数は減つたが、教室から学生の姿が全く消え去つた学期は一度もなかつた。結局英文学の学燈は時局の荒い風に吹かれながらもえ続けたと言つてよい。今にして憶えば当時の支配的勢力には案外寛容さがあつて大学の自治には容易に手をつけなかつたらしい。むしろ文化人とか知識人と言われる人達が支配的勢力に迎合して、戦後にその醜態を囁かれた例が多いのではあるまいか。

戦時の日常生活に於ける苦難——毎日の空腹感や空襲に対する恐怖など——は大学に職を奉ずる者も一般市民と異なる所はなかつたろう。しかし英文学と言わず一般人文科学研究にたずさわる人々にとりては必要文献の人手難や研究室の荒廃と言つた別の苦難が加わつた。その苦難は試煉であり、学問に対する熱意と人文科学者としての節操が厳しい試煉の台に据えられた。僕自身のことを言うと、その間絶えず学問精進の道を歩み続けたなどは義理にも言えないほど虚脱と昏迷の中をさまよつた。營養失調の一步手前まで来てはものを読み筆を執る氣力がなくなる。敗戦の色は益々濃くなり生活上の不安と焦慮のうちに月日が流れてゆく。しかしこうした空白の合間に自分が甦つて、これではいけない、これでは精神的自殺だ、と囁く声が自分の中に聞えて来ることもあつた。防空壕掘りに精力を消耗しつくすより寧ろ自分の好きな中世ロマンスを読みながら爆弾にあたつて死んだ方がましであると感ずる時もあつた。冷酷極らない現実の生活苦のさなかに異国の中世文学を読んでどれ程の感銘が得られるかは別として、文学研究で渡世している自分にとり、それは義務であり、また悦楽である筈である。そうした反省が長い無氣力から自分を救つてくれたこともある。

生活から遊離した文学研究は人生の現実に直面してその根底を揺すぶられるものだ、と痛感したのはその頃であつた。文学研究と研究者自身の生活との相関係の意義をその頃遅播きながら知つた。文学の鑑賞と知識がただ単に文化生活のアクセサリーであつてはならぬし、またその研究発表がただ単に自分の業績リストの量を殖すためであつてはならぬ。そんなものでなく、もつと実践的な、もつと深い意味に於て研究者の生活と結びつき、日常生活の中に溶けこむ——やがては研究者の人生觀と性格に或る強い作用を及ぼす——そこまで行かねば文学研究は本物でないのではないかと感じた。ここで言う相関係は狭く解釈すると妙なことになる。中世文学の研究者が中世人の生活に帰らねばならぬとか、Milton 学者が清教的信仰を有たねばならぬとかの意味ではない。凡そ文学作品はその時代の文化環境を背景としてその作家の内的体験を直接に或は間接に表現していると考えられる。外的環境は現代のそれと交つていても、作品によつて伝達される作者の内的經驗の中にはこれを受取つて吾々自身の生活の中に生かし得るものが多かれ少かれ在るに違いない。さもなければ文学作品は存在しないし、また存在の価値もない筈である。文学をまともに鑑賞することはその作家の心を自分の心の中に移し入れることであり、或る作家を永い間研究し鑑賞を繰返し積み重ねてゆく間には不知不識のうちに作家の内的經驗が研究者の中に移植され消化され変形されて残るに違いない。そしてそれは研究者自身の思想や情緒の動き方に影響するに違いない。そこまで行かねば文学研究は本物でないのではないかと感じた。ロマンティシズム研究も只知識としてのロマンティシズムでは足りない。何

かの意味で、何かの形でロマンティズムが研究者自身の生活の中に具現するようではなければならぬ。

茲で憶出すのは、僕が学生時代に教わつたイギリスの詩人ニコルズ (Robert Nichols) が講義のとき言つた言葉の一節である——Shelley を研究する日本の学生は現在の日本で如何に生活し行動すべきかを考え給え、と言う趣意だつた。つまり Shelley 読みの Shelley 知らずではいけないと言ふ意味だつたと記憶している。

しかしこの問題を考える場合にそれに伴う幾多の条件乃至制約を無視してはならない。例えば Shelley を専攻する学徒が Shelley の社会観と恋愛観をそのまま実践に移すとすればその学徒は現代生活の中で多くの壁にぶつかり血みどろになるであらう。学びとるべきは Shelley 精神の根底に横わるもの、即ち私見によれば一途に純真に美を求める欲求がそれであり、これが事にふれて或は支配勢力への反抗、或は伝統的結婚制度の否定となつて現われているのだと思ふ。

英文学にはそれぞれ特殊な社会観乃至人生観を有ち、それを作品を通じて読者に宣べ伝えようと意図する作家が頗る多い。勿論「私的関心」を以て個人の情緒や行動を主題とする散文韻文の作品も数多いけれど、作家が「公的関心」を以て社会を描き、社会制度の欠陥を示し、或は文明、時代、人間性一般に対する批判をテーマとする作品も決して少くない。この種の作品は message 文学と言つてもよからう。日本文学と較べて此の種の作家と作品の多い点が英文学の特質の一つであらうと思われる。ごく身近な例をとつてみると Wells の自然科学の進歩に依拠する社会改造説、Shaw の Fabian socialism による社会批評、T. S. Eliot のカトリック教的世界観に基く文明批評、或は Aldous Huxley の自然科学の将来に対する懐疑とこれに関連して神秘的或は東洋的思想の導入による文明社会の救済策など故拳に違がない程である。そしてこれらの作家の立つている思想的基盤がそれぞれ異つてると同時に、その志向する方向も甚だ相違している。仮りに Milton, Shaw, Lawrence と言ふ三作家の名を並べてみただけでも、そのそれぞれ信ずる所、語る所、強調する所に、氷炭相容れないものが如何に多く存在するかを暗示するに足ることであらう。

従つて斯うした作家の message をいちいち、額面通りに受取り、それを自分の生活の中に持つて来るなどと言ふことは所詮不可能でもあり、愚かしい業でもある。総じて文学作品の message は時代の推移によりその価値が変わるものであり、文学としてはその底にある人間性が重大である筈である。

前に並べてみた三人の作家は頗る相異なるものをそれぞれ有つているにも拘らず、そこには共通の底流があるように感ぜられる。何か

ひたむきな意欲、自分の信念を守り続けて世間の嘲笑なり迫害に屈しない強毅な心構えである。殉難殉教の体験に乏しい日本人は Milton を持ち、Sir Thomas More を持つ英文学から学ぶ所が多い筈である。Lawrence の小説の特質は、彼の鋭い感性もなることながら、彼が現代資本主義社会と近代欧州文明とに対する反抗精神の真摯さにある。セックス過剰は彼の欠陥であり、それに幻惑されるようでは文学は理解できない。

英文学のいま一つの特質はその humour の豊かさであり、此の点でも吾々の学ぶ所は多いように思われる。英文学史上一流の作家でも humour が欠けていればそれは大きな欠点とされる。また特に豊かな諧謔的気分を有つた作家でもそれぞれ humour が質的に異つてゐる。Dickens, Lamb, Shakespeare, Chaucer — みな傑れた humourists であるがそれぞれ持味が違う。その差異は容易に捕捉し難いデリケートの違いであり、例えば食通のよく語る瀬戸内の鯛と外海の鯛の味の違いに似たようなものであろうか。

さまざまの、時には庄えつけられそうな気分を和らげる謂わば緩衝的な機能を有つイギリス人の諧謔には吾々として学ぶ所が多い。断頭台上に首をさしのべながら獄吏に向つてあの諧謔を弄し得た Sir Thomas More の偉大さには近ずき得ないとしても、吾々の日常生活の中にもつと humour の温みがあつて欲しい。公的私的の人間の集いに於ける適度の諧謔は決して儀礼を損うものでなく謂わば刺身のつまか、そばの薬味くらの役を勤める。

英文学を三十年のあいだ教えて、若い学生と共にいろいろの作家を読んだことは今となつて楽しい憶出である。自分の趣味は中世にあつたけれども教室での講読はそれに偏しないように心がけたつもりだ。難解な Browning で学生を悩ましたり、Chaucer の猥雑さに不心得の学生を喜ばしたこともあつた。当時聴講した古い卒業生の中には声色まじりにその頃の僕の講義ぶりを語つて旧師を揶揄する悪戯者もある。翌日の講義の原稿に苦吟したこと、山と積まれた卒業論文の審査にてこすられたことなど憶出は尽きない。要するに僕は凡庸な一教師に過ぎなかつた。今後も凡庸な老学徒として余生を送る外はない。しかし自分が英文学を学んだことは生涯の幸福であつたとしみじみ思う。凡庸無能な自分は随分無益な道草を喰つて身につかない読書に乏しい精力を費したこともあるが、英米の作家から教えられる所がないでもなかつた。殊に Chaucer から暗示され Morris と Thoreau から汲みとり得たことは、その幾分なりとも自分の老後の生活の中に修業してみたいと念願している。